

1 実態調査の目的と内容

特別支援学校における知的障害のある児童生徒の指導目標の設定及び指導内容の選択・組織についての現状と課題を明らかにし、その結果を基に指導目標の設定や指導内容の選択・組織の具体的な手順を提案することで、特別支援学校における全体指導計画や個別の指導計画の改善を図り、一貫性・系統性のある指導の充実に資するために、実態調査を行った。

調査内容

- (1) 個別の指導計画について
- (2) 全体指導計画について
- (3) 全体指導計画と個別の指導計画、授業との関係について
- (4) 評価について

2 調査の方法等

○ 対象

県下の県立特別支援学校16校

各学部における知的障害者である児童生徒に対する教育を行う担任（176人）

設置学部	回答者	回答人数（校数）
小学部，中学部，高等部	各学部の担任（4人×3学部）	156（12人×13校）
小学部，中学部のみ	各学部の担任（4人×2学部）	16（8人×2校）
高等部のみ	担任（4人×1学部）	4（4人×1校）

○ 方法

質問紙法

○ 調査日

平成26年8月1日

3 実態調査の結果（回収率100%）

(1) 個別の指導計画について

問1 実態把握の内容を指導目標や指導内容に生かしていると思いますか（図3）。

指導目標や指導内容に「十分に生かしている」，「生かしている」割合は，95%であった。

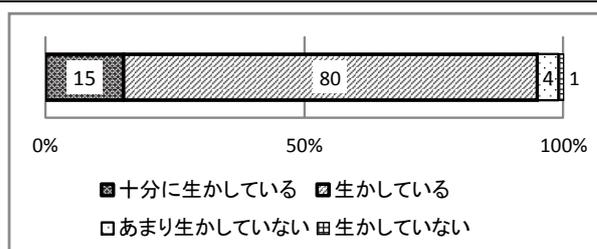


図3 実態把握の結果の生かし方

問2 チェックリストを活用した実態把握の内容を目標設定に生かしていると思いますか(図4)。

目標設定に「十分に生かしている」、「生かしている」割合は、53%であった。「既習学習状況や達成状況の把握」、「妥当な目標の吟味と設定」などで生かしている一方、生かしていない理由は、「実態に合っていない」、「チェックしただけになっている」ことなどが挙げられていた。

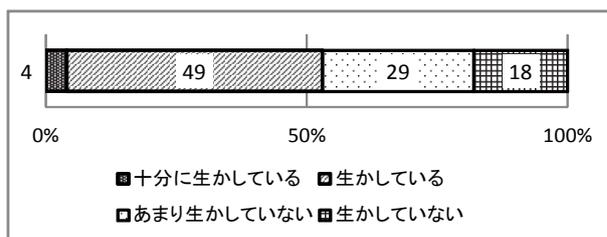


図4 チェックリストの生かし方

問3 心理検査や発達検査を活用した実態把握の内容を目標設定に生かしていると思いますか(図5)。

目標設定に「十分に生かしている」、「生かしている」割合は、40%であった。「認知面、学習方法の把握」、「客観的な尺度」などで生かしている一方で、生かしていない理由は、「実態に合っていない」、「分析が難しい」、「結果の生かし方が分からない」などが挙げられていた。

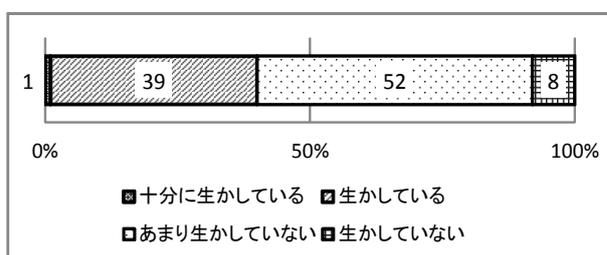


図5 心理検査等の生かし方

問4 個別の指導計画の目標を日々の授業に生かしていますか(図6)。

授業に「十分に生かしている」、「生かしている」割合は、90%であった。「指導内容の設定・精選につなげている」、「年間、学期目標と関連させている」などで活用している一方、生かしていない理由としては、「学期、単元・題材レベルで活用している」、「授業によっては生かせないことがある」ことなどが挙げられていた。

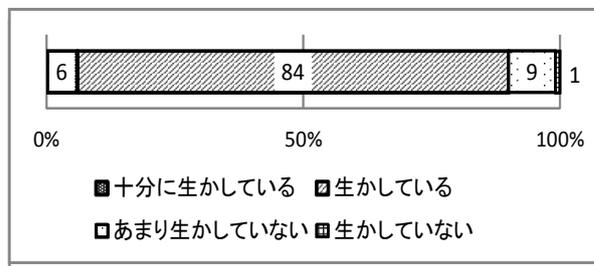


図6 個別の指導の目標の生かし方

(2) 全体指導計画について

問1 全体指導計画において目標を設定するときに、観点を決めていますか(図7)。

観点を決めている割合は、79%であった。観点は、「評価の4観点」、「キャリア教育の視点」、「学習指導要領の目標、内容」、「発達の段階」、「児童生徒の実態」、「身に付けさせた力」などが挙げられていた。

設定していない理由は、「実態を踏まえて設定している」、「個人で設定している」、「観点の設定が困難である」、「共通理解できていない」ことが挙げられていた。

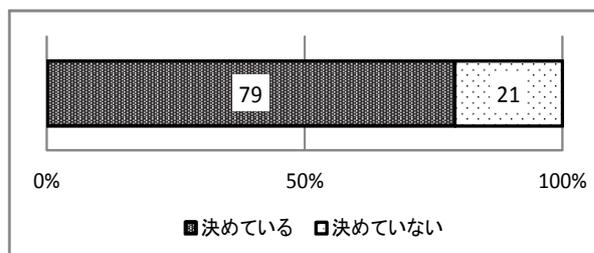


図7 全体指導計画における目標設定の観点

問2 全体指導計画で指導内容の組織化を図る際に、学習指導要領のどのような内容に留意していますか（複数回答可）（図8）。

留意している割合が一番多かったのは「発達の段階」であった。50%を越えているものは、「発達の段階」、「基礎的・基本的事項」、「内容の関連」、「児童生徒の興味・関心」であった。

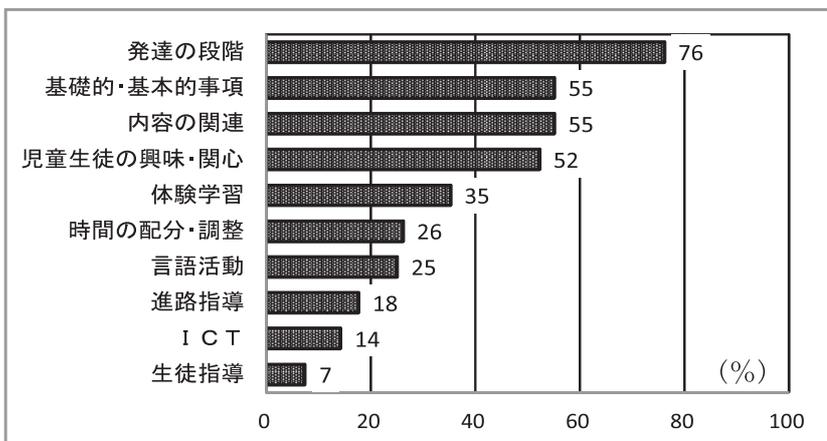


図8 全体指導計画における指導内容の組織化を図る際の留意点

問3 全体指導計画を見直す際に、根拠としているものは何ですか（複数回答可）（図9）。

根拠としているものは、「特別支援学校の学習指導要領」、「前年度の反省」、「児童生徒の実態」の順に多く挙げられていた。

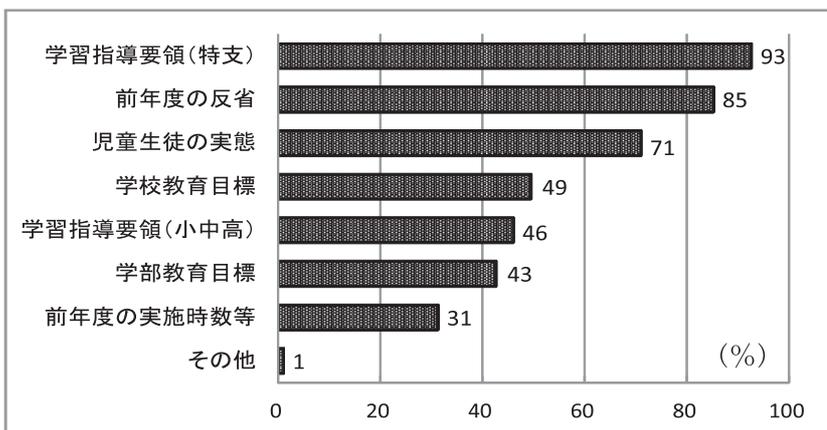


図9 全体指導計画の見直しの根拠

問4 全体指導計画の活用の際の課題は何ですか（複数回答可）（図10）。

問5 全体指導計画を見直す際の内容の課題は、どのようなものがありますか（複数回答可）（図11）。

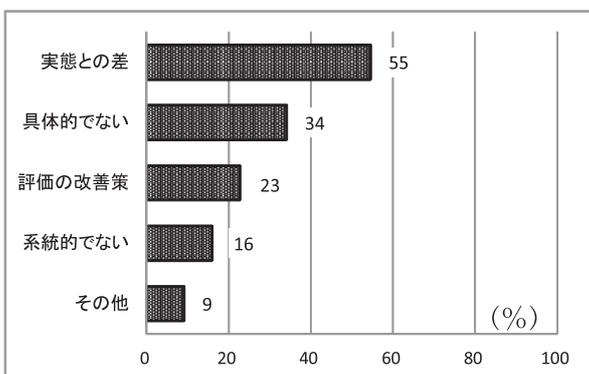


図10 全体指導計画の活用における課題

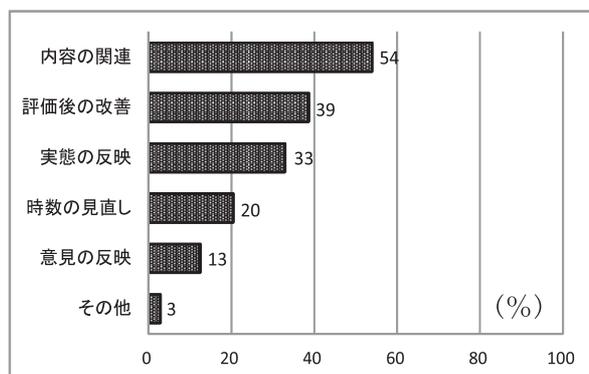


図11 全体指導計画の見直しにおける課題

活用の際の課題としては、「実態との差」が55%で一番多く挙げられていた。一方で見直しの際の課題としての「実態の反映」は33%であった。

見直しの際の課題としては、「内容の関連」が54%で一番多く挙げられていた。一方で活用の際の課題としての「系統性」は16%であった。

(3) 全体指導計画と個別の指導計画、授業との関係について

問1 全体指導計画の単元（題材）における指導目標を具体的に設定していますか（図12）。

具体的な指導目標の設定を「十分行っている」、「行っている」割合は、76%であった。

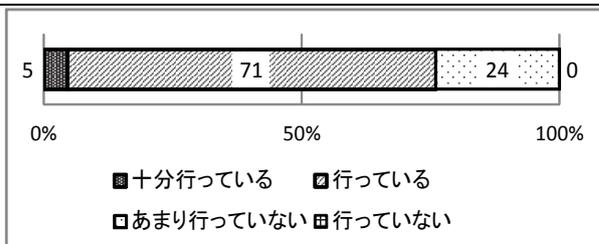


図12 全体指導計画における指導目標の設定

問2 個別の指導計画の目標を達成できるように、全体指導計画における学習活動の設定や配列の見直しを行っていますか（図13）。

学習活動の設定や配列の見直しを「十分行っている」、「行っている」割合は、54%であった。

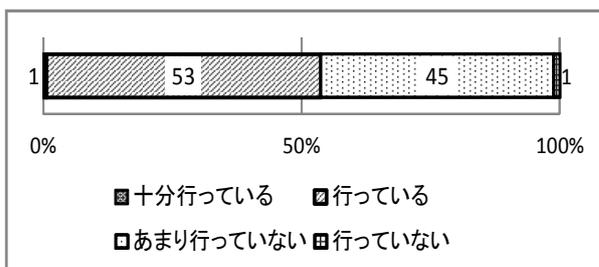


図13 全体指導計画における学習活動の見直し

問3 個別の指導計画の目標を達成できるように、1単位時間における学習活動の設定や配列の見直しを行っていますか（図14）。

学習活動の設定や配列の見直しを「十分行っている」、「行っている」割合は、62%であった。

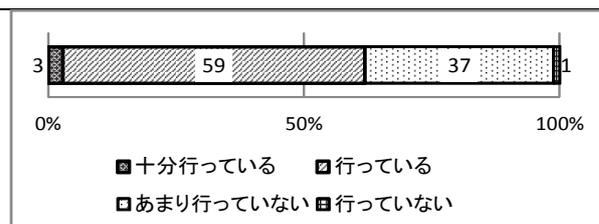


図14 1単位時間における学習活動の見直し

問4 1単位時間の授業において、形成的な評価を行っていますか（図15）。

形成的な評価を「十分行っている」、「行っている」割合は、49%であった。

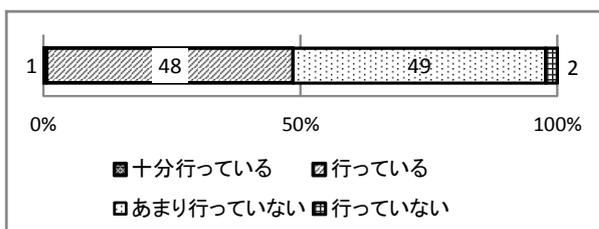


図15 1単位時間における形成的な評価

問5 児童生徒の学習状況や個別の指導目標について、目標や学習活動の妥当性などの検討を行っていますか（図16）。

目標や学習活動の妥当性などの検討を「十分行っている」，「行っている」割合は，72%であった。

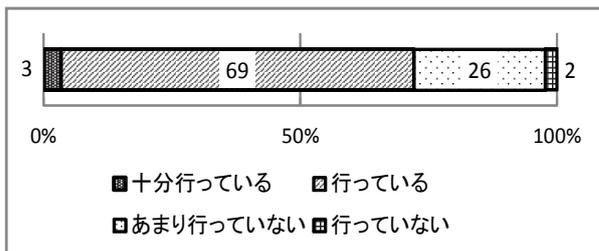


図16 指導目標等の妥当性の検討

(4) 評価について

問1 前時の授業の評価の改善策を，次時の授業に反映していますか（図17）。

前時の授業の評価の改善策を「十分反映している」，「反映している」割合は，85%であった。「前時の反省記録の活用」，「授業後のアンケート回覧や授業メモの活用」，「授業直後に意見交換を行う」などの工夫をしている一方，反映していない理由としては，「毎回は難しい」，「反省の観点が明確になっていない」，「指導者全員での振り返りの時間確保が難しい」ことなどが挙げられていた。

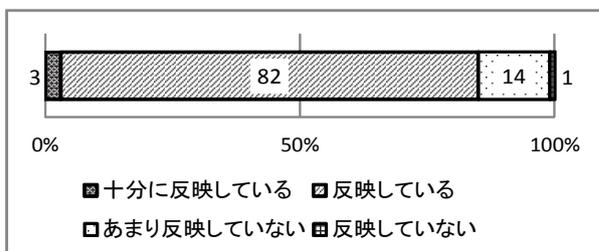


図17 前時の評価の改善策の反映

問2 単元（題材）に関して，教師の指導の評価をするときに参考にしているものは何ですか（複数回答可）（図18）。

教師の指導の評価をするときに参考にしているものは「指導方法」，「教材・教具」，「内容」，「目標」の順に多く挙げられていた。

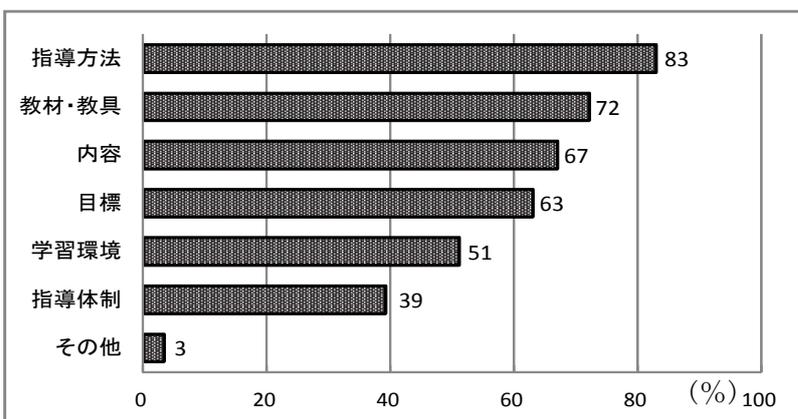


図18 教師の指導の評価で参考にしているもの

4 考察

実態調査の結果から、研究の視点に基づき各学校における現状と課題について表1にまとめた。

表1 実態調査の現状と課題

項目	現 状	課 題
指導目標の設定について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実態把握については、行動観察などの主観的な実態把握が中心でチェックリストや心理検査等などの客観的な実態把握が十分でない(図3, 4, 5)。 ・ チェックリストや心理検査等については分析やその生かし方について理解が十分でないため、目標設定に生かしきれていない(図3, 4, 5)。 ・ 個別の指導計画の目標を授業に生かすことは意識しているが、評価の4観点などの理解が十分でないために、指導目標を設定する際の観点について共通理解が十分に図られておらず、全体指導計画の目標を児童生徒の実態に応じて具体的に設定しきれていない(図6, 7, 12)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導目標を設定するためには、どのような実態把握や方法が必要なかを整理することが必要である。 ・ チェックリストや心理検査等については分析やその生かし方について、その例を紹介することなどが必要である。 ・ 個別の指導計画の目標設定に当たって、学力の三要素や評価の観点などを押さえることなど、指導目標を設定する際の観点について示すことが必要である。
指導内容の選択・組織について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導内容を組織化する際の留意点として児童生徒の実態から発達の段階は意識が高いが、基礎的・基本的事項や内容の関連などについてはあまり意識していない(図8)。 ・ 個別の指導計画の目標を授業に生かすことは意識しているが、その目標を達成するために、全体指導計画における学習活動の見直しや1単位時間における学習活動の見直しが十分に行われていない(図6, 13, 14)。 ・ 教師の評価については、「指導方法」、「教材・教具」が多く挙げられており、何を教えるかよりもどう教えるかについての意識が高い(図18)。 ・ 全体指導計画を見直す際の根拠として、目指す子供像である「学校教育目標」と「学部教育目標」、「前年度の実実施時数等」の割合があまり高くなく、児童生徒に身に付けさせたい力やそのための内容、必要な時数などについてあまり意識していない(図9)。また、全体指導計画の活用と見直しにおける課題について、意識に差があり、活用の際の課題が見直しに十分に反映されていない(図10, 11)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導内容の選択・組織を行う際の基本的な考え方や手順の視点を明確にすることが必要である。 ・ 全体指導計画と個別の指導計画を関連付けながら、単元(題材)や1単位時間の授業の指導内容を選択・組織するためには、どのような手順で行うかを整理することが必要である。 ・ 児童生徒にどのような力を身に付けさせたいのかを明確にすることが必要である。 ・ 児童生徒に身に付けさせたい力をどのように考えていくかなどの視点を整理することが必要である。また、全体指導計画の見直しの観点や手順を整理し、全体指導計画の指導目標や指導内容の改善を図ることが必要である。
評価について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時の授業の評価の改善策を次時の授業に生かす工夫は意識して行っている。しかし、次の授業へ生かす根拠としての観点が明確になっていないことなどから1単位時間の形成的評価や目標などの妥当性の評価が十分に行えていない(図15, 16, 17)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体指導計画の単元(題材)における児童生徒の学習状況や個別の指導目標について、目標や学習活動の妥当性などを検討し、次単元(題材)や次年度の計画に生かす方法、評価の観点について整理することが必要である。